

# 【漁況】

## [マアジ]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成18年は16万7千トンとなりました。

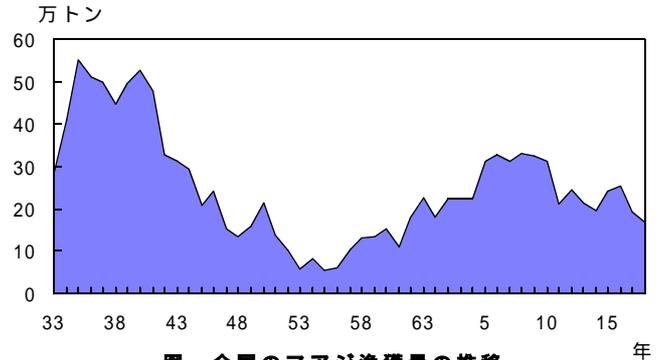


図 全国のマアジ漁獲量の推移

### 2. 平成21年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、天草沖、牛深沖、甑島西、甑島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖、開聞沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ豆（1歳魚：平成20年生まれ）主体に1,064トンの水揚げで、前年の76%及び平年の76%でした。

### 3. 平成21年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ小（1歳魚：平成20年生まれ）となるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年・平年を上回ると考えられます。マアジ2歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みと考えられます。マアジ3歳魚以上は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みと考えられます。

総合的に判断すると、前年・平年を上回ると考えられます。

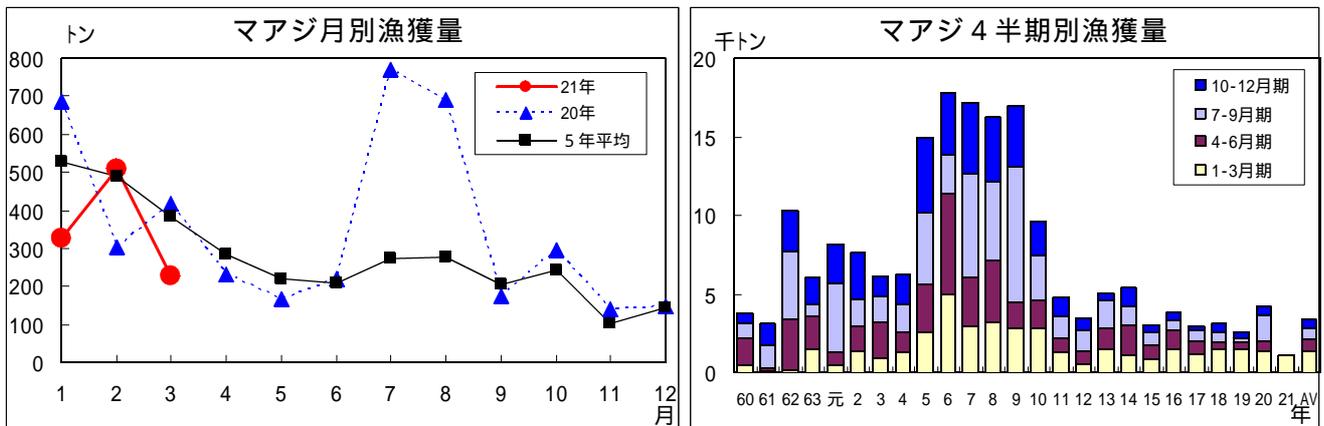


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成16～20年）の平均値(AV), 3月は平成21年3月18日までの水揚げ量を使用。

# [ サバ類 ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンを一ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンになりました。平成17年から再び増加し平成18年には65万2千トンとなりました。

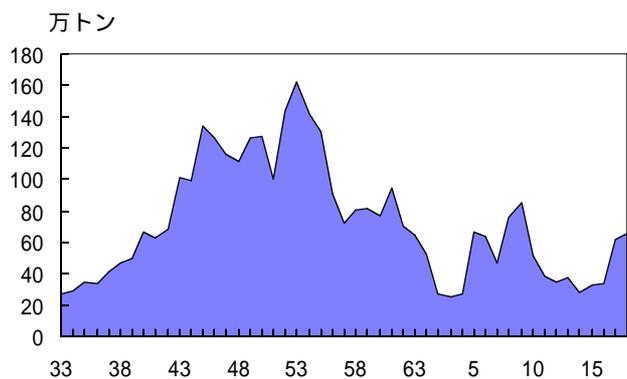


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

## 2. 平成21年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、天草沖、甌島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、屋久島南、種子島東、竹島沖、馬毛島沖に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ中小(2・3歳魚：平成19年生まれ・平成18年生まれ)主体にゴマサバ小(1歳魚：平成20年生まれ)、ゴマサバ中(4歳魚以上：平成17年生まれ以上)混じりで3,289トンの水揚げで、前年の75%及び平年の85%となりました。

## 3. 平成21年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小(2歳魚：平成19年生まれ)及びゴマサバ小(1歳魚：平成20年生まれ)となるでしょう。

来遊量は前年を上回って平年並みになるでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ1歳魚は、前年の漁期後半漁獲の主体となったことから前年を上回る来遊が期待されます。ゴマサバ2歳魚は、前年より漁獲の主体となっていて、今後も前年を上回る来遊があると考えられます。3歳魚以上は、資源評価結果及び前期の漁獲状況から残存資源量がかなり少ないと判断されるため散発的な来遊になると考えられます。

総合的に判断して、前年を上回り平年並みと考えられます。

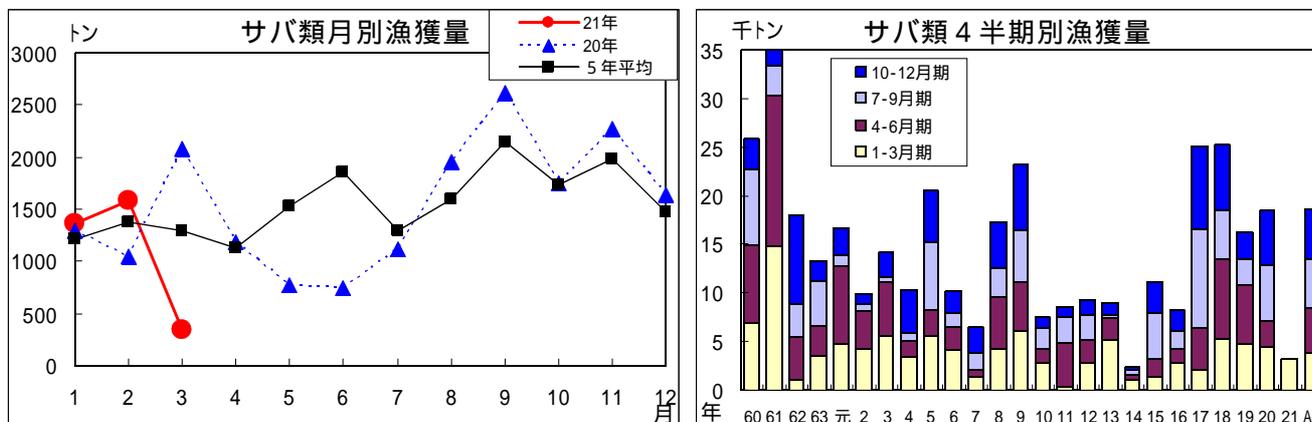


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV)、3月は平成21年3月18日までの水揚げ量を使用。

# [ マルアジ (アオアジ) ]

## 1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、20年は330トンとなりました。

## 2. 平成21年1～3月期の漁況の経過

まとまった漁獲はなく、期全体で33トンの水揚げで、前年の14%及び平年の20%でした。

## 3. 平成21年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ中・大(2歳魚以上)でしょう。

来遊量は非常に低水準であった前年を上回り、平年を下回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ小(1歳魚)は、現在まで非常に低水準で経過していることから前年・平年を下回ると考えられます。マルアジ中・大(2歳魚以上)は、低水準ですが前年の非常に低い来遊量は上回ると考えられます。

総合的に判断して、前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

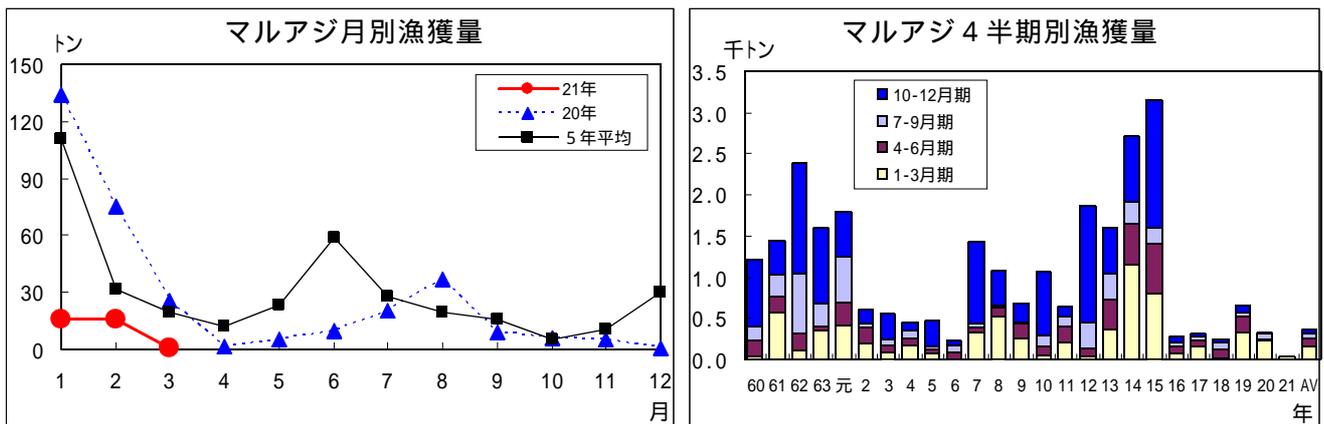


図 マルアジ (アオアジ) まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV), 3月は平成21年3月18日までの水揚げ量を使用。

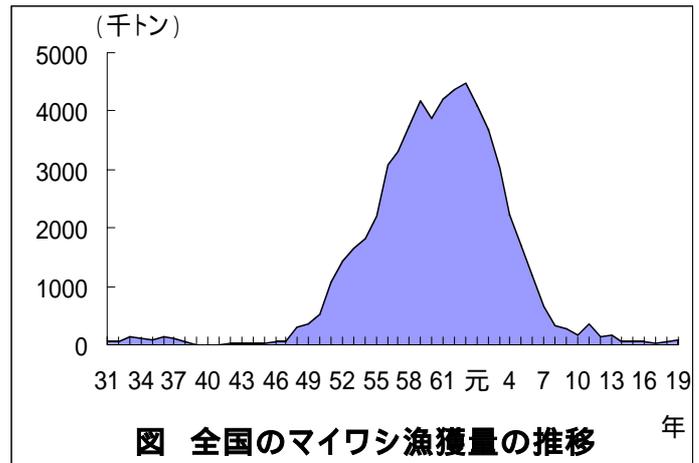
# [マイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成17年は2万8千トンとなりましたが、平成18年は5万3千トン、平成19年は7万9千トンと近年はわずかに増加傾向となっています。



## 2. 平成21年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

まとまった来遊は見られず、鹿児島県4港のまき網で0.6トン（前年比8%，平年比1%）、北薩海域の棒受網では0.1トン（前年比23%，平年比1%）と、前年・平年を大きく下回りました。

## 3. 平成21年4～6月期の見とおし

まとまった来遊はないでしょう。

（根 拠）

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあると考えられます。

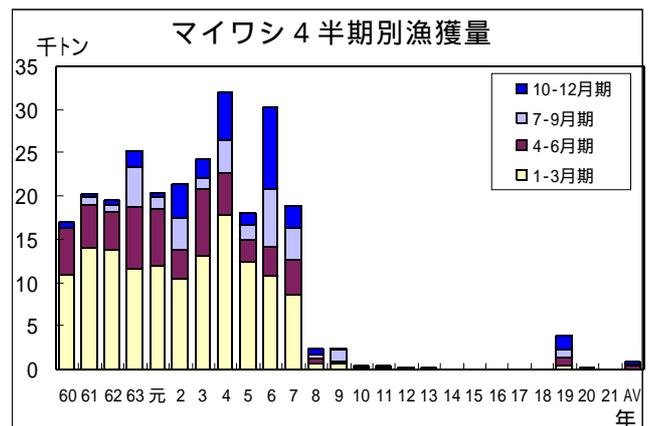
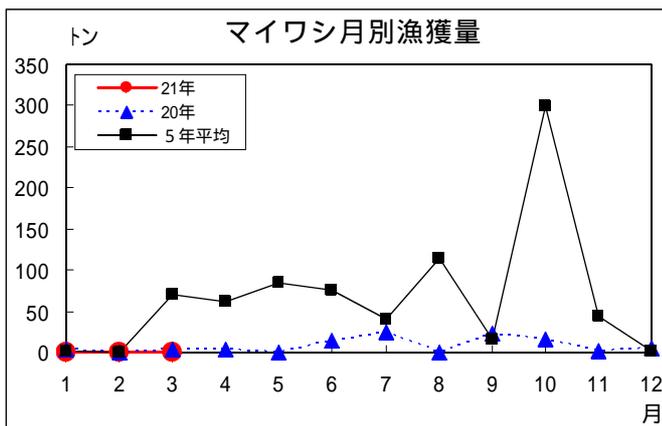


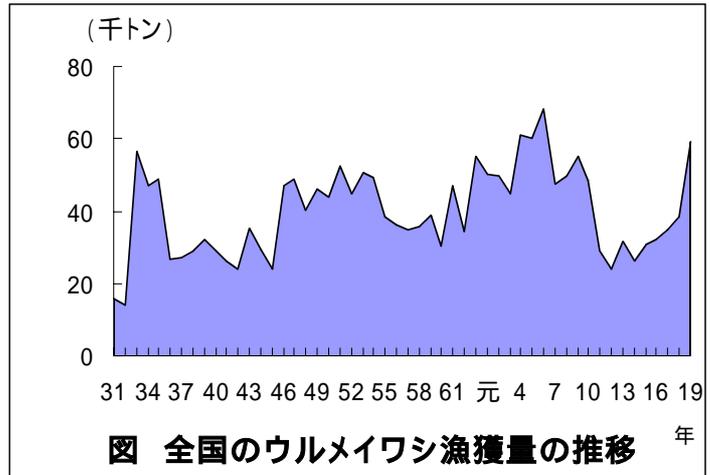
図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成16～20年）の平均値(AV)，平成20年3月18日までの水揚量を使用。

# [ウルメイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成19年は5万9千トンでした。



## 2. 平成21年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で419.0トン(前年比101%，平年比110%)，北薩海域の棒受網でも73.7トン(前年比107%，平年比145%)と，前年並みで平年を上回りました。

## 3. 平成21年4～6月期の見とおし

まき網では大羽銘柄(1歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となり，北薩海域の棒受網では小羽銘柄(0歳魚・平成21年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。前年並みで平年を下回るでしょう。

（根拠）

今期漁獲の主体となる1歳魚(平成20年生まれ)の1～3月期の本県海域での漁模様より，来遊水準は前年並みに推移すると考えられます。

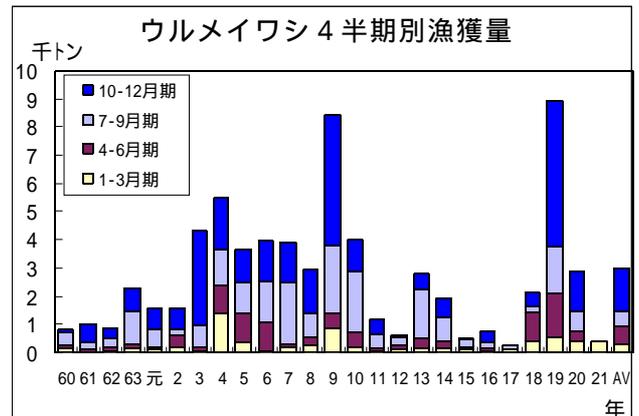
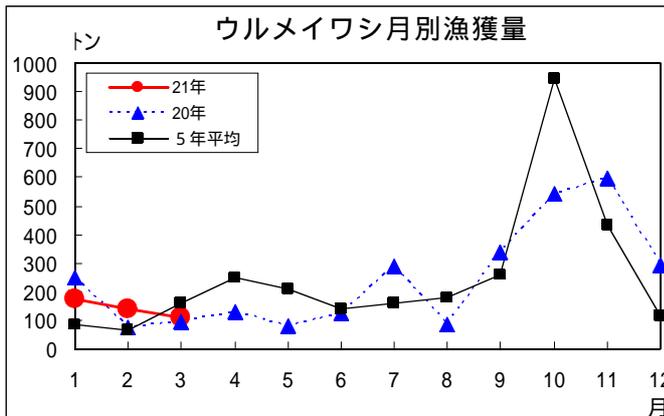


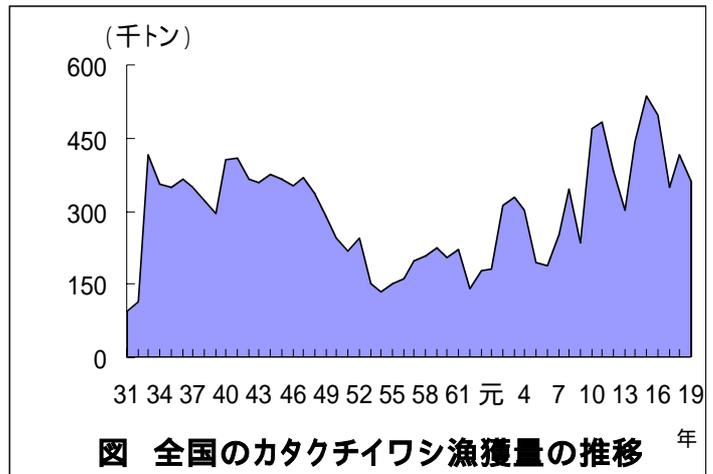
図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成16～20年）の平均値(AV)，平成20年3月18日までの水揚量を使用。

# [ カタクチイワシ ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は34万7千トン大きく減少し、平成19年は41万6千トンとなりました。



## 2. 平成21年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で2.1トン(前年比0.1%，平年比0.3%)，北薩海域の棒受網でも32.4トン(前年比14%，平年比19%)と，前年・平年を大きく下回りました。

## 3. 平成21年4～6月期の見とおし

期間の前半は大羽銘柄(1歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体で，後半は小中羽銘柄(0歳魚・平成21年生まれ)が漁獲の主体となり，前年・平年を下回るでしょう。

(根拠)

年明け以降の大羽群の来遊が低調に推移したことから，今期の漁獲の主体となる1歳魚(平成20年生まれ)と0歳魚(平成21年生まれ)の来遊水準は低いと考えられます。

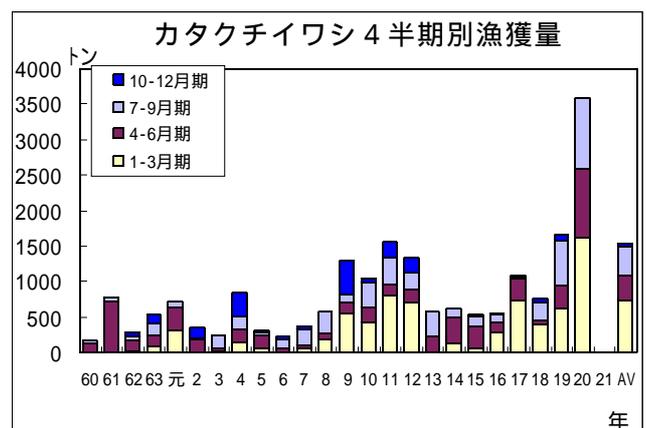
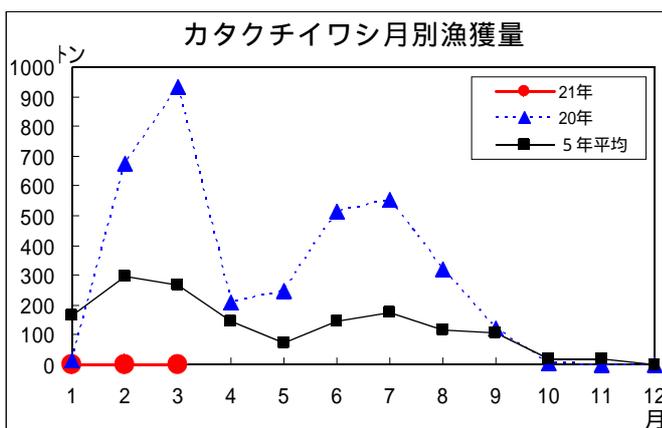


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV)，平成20年3月18日までの水揚量を使用。

# [シラス]

## 1. 経年経過及び平成21年1～2月期の漁況の経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の5,450トンを一ピークに減少傾向を示し、平成14、15年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後平成16年は3,507トンと比較的好調に推移しましたが、平成17年以降減少傾向を示し、平成20年は2,080トンとなりました。

志布志湾海域では平成12年の1,407トンを一ピークに減少傾向を示し、平成14年は396トンまで減少しました。その後平成15年以降は増加傾向を示し、平成19年は2,374トンと好調に推移しましたが、平成20年は1,172トンまで減少しました。

今期の西薩海域はカタクチシラス主体に8.7トンの水揚げで、前年の6%、平年の17%と前年・平年を大きく下回りました。志布志湾海域ではカタクチシラス主体に43.3トンの水揚げで、前年の159%、平年の110%と前年・平年を上回りました。

## 2. 平成21年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、カタクチシラスでしょう。来遊量は、西薩海域・志布志湾海域とも前年・平年を下回るでしょう。

(根拠)

西薩海域ではカタクチイワシ親魚の来遊が低調に推移したこと、また本年3月の卵稚仔調査結果でカタクチイワシ卵の出現状況が悪かったことから、前年・平年を下回ると考えられます。志布志湾海域では日向灘のカタクチイワシ親魚の来遊が低調に推移したこと、また日向灘シラス漁の漁模様が低調に推移していることから前年・平年を下回ると考えられます。

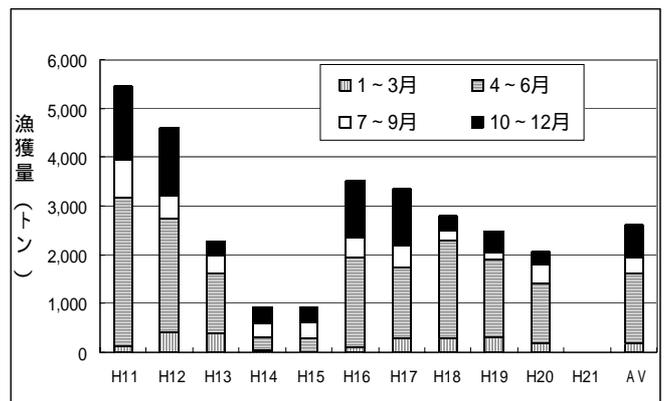
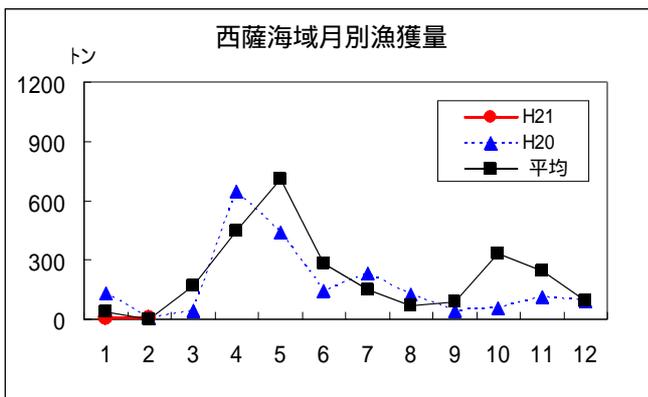


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV)、平成20年2月末までの水揚量を使用。

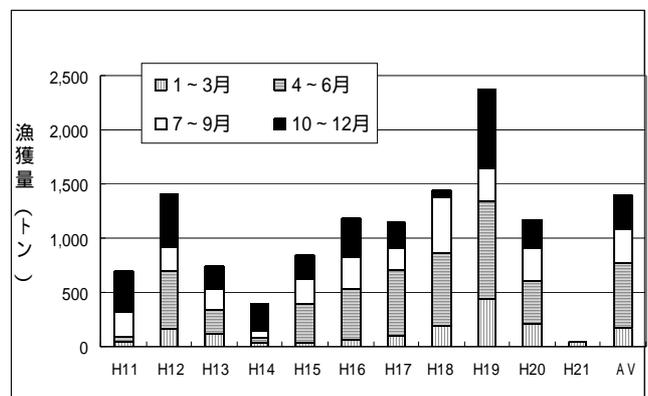
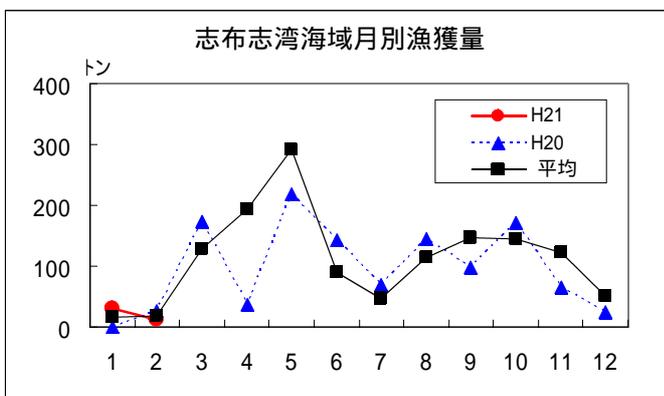


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV)、平成20年2月末までの水揚量を使用。

[ イワシ類参考資料 ]

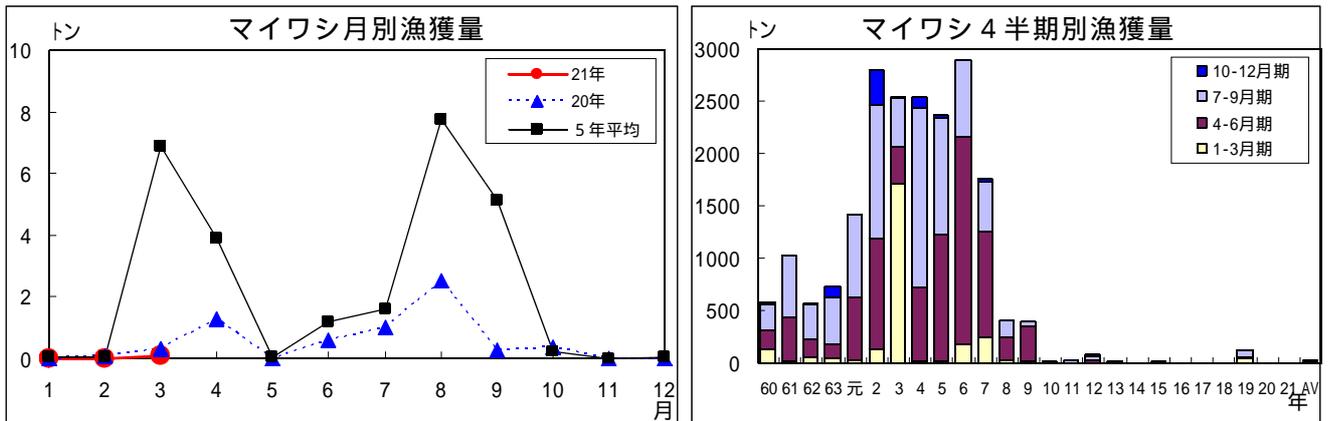


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

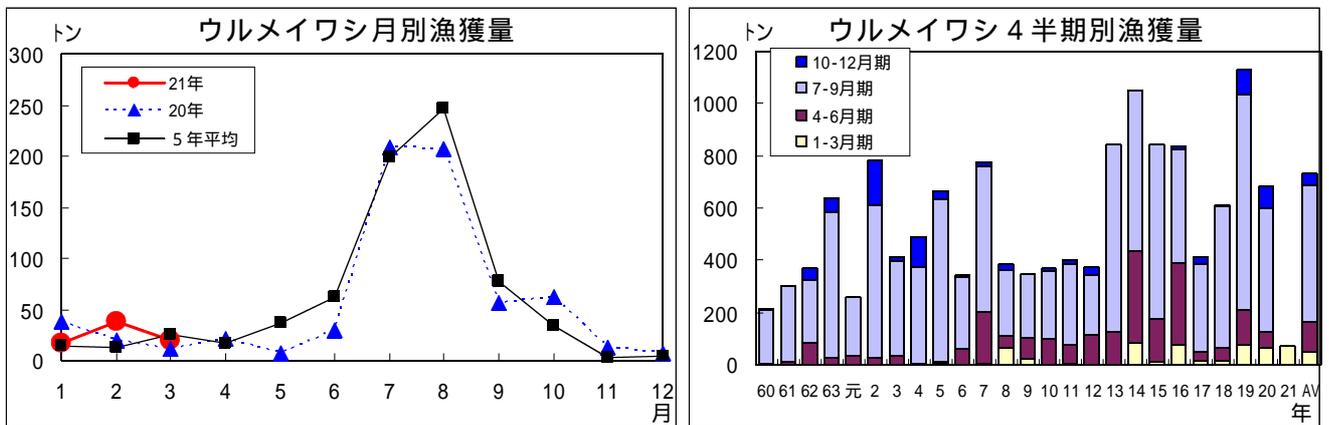


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

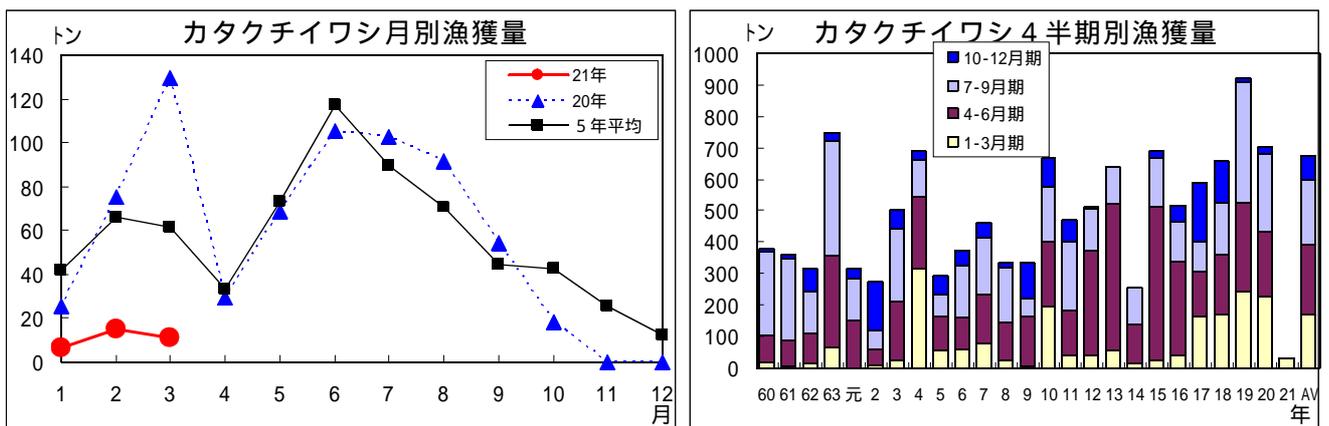


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

平年値は過去5年（平成16～20年）の平均値(AV)，平成20年3月18日までの水揚量を使用。

## [ 参考：漁況経過のみ記載 ]

### ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（4港計）

#### 1. 経年変化及び平成21年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成2年の21,700トン进行ピークに急減し，平成6年以降は，1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成20年は2,414トンとなりここ3年間横ばいとなりました。

平成21年1～3月は，薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体の漁獲があり，期全体では595トンの水揚げで，前年の172%及び平年の111%でした。

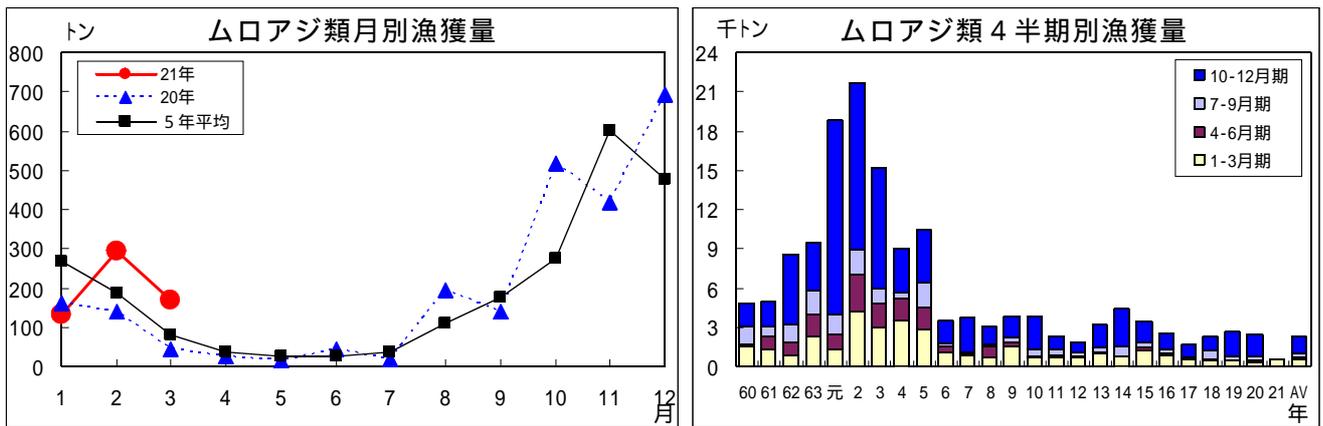


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV), 3月は平成21年3月18日までの水揚量を使用。

### オアカムロ（4港計）

#### 1. 経年変化及び平成21年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の5,300トン进行ピークに一端減少し，平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと前年・平年を大きく上回りました。

平成21年1～3月は，主に薩南海域で漁獲があり，期全体では459トンの水揚げで前年の44%及び平年の87%でした。

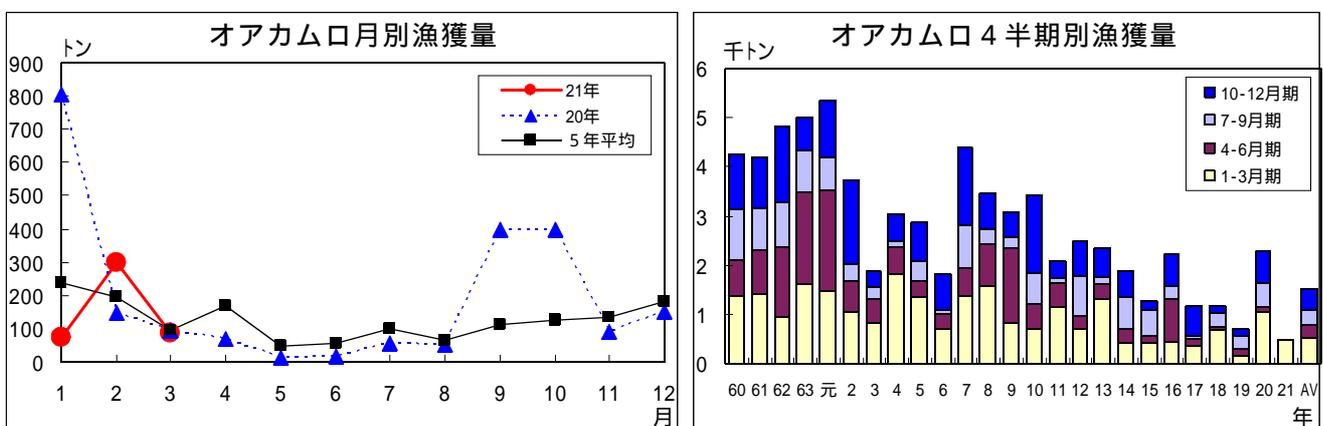


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成16～20年)の平均値(AV), 3月は平成21年3月18日までの水揚量を使用。